

ハンセン病事実検証調査事業 第9回検証会議

沖縄愛楽園 聞き取り（公開）

03.4.17（木）

【事務局（加納）】 お待たせいたしました。定刻、10分ほど過ぎましたが、ただいまから第9回ハンセン病検証会議を始めさせていただきますと思います。

まず、始まりにあたりまして、愛楽園自治会長、金城様より、一言ごあいさつをいただきたいと思います。

【金城雅春自治会長】 会場のお越しの皆様、おはようございます。ただいま司会のほうからご紹介ありました愛楽園自治会の金城でございます。

昨日来、検証会議の先生方が園内を見学いたしまして、愛楽園についての概要がおわかりになったかと思います。きょうは、また私たちの入所している仲間から、沖縄においての被害の実態を調査していただくということでございます。沖縄における実態というのは、やはり本土の療養所とは違う、生まれた経緯、またその間に起こってきた大きな戦争を挟んでの経験。そして、アメリカ支配になりまして、日本政府から離れたという経験、ほんとに本土にない経験をしております。ぜひ、そういったことを先生方も、本土との違いをあらわしていただきたいというふうに思っております。

開会も10分遅れていますので、簡単に終わりますが、きょう、ちょっとお断りしておりますが、空調がちょっと調子悪くて、窓をあけさせていただきますので、きょう、天気もかなり暑くなるようですので、どうぞ、上着を脱いで、楽な格好で会議をやったほうが、進むのかなというふうに思いますので、一言つけ加えさせていただきます。

それでは先生方、よろしく願いいたします。ありがとうございました。

【事務局（加納）】 ありがとうございました。

それでは、聞き取りを始めさせていただきますと思います。きょうの予定ですが、10時半ごろまで、公開の場で聞き取りをさせていただいて、その後、非公開の方の聞き取りをさせていただきますので、こちらのほうの会場を後にいたしまして、別室のほうに移動させていただきますと思います。

その後、11時15分から、またこちらの会場で聞き取りを再開させていただく予定にしておりますが、その間、一般の傍聴の方は、申しわけありませんが、一時、各自でお過

ごしいたきたいと思います。11時15分からは、沖縄タイムスの記者の方からの聞き取りを11時15分から12時まで、予定させていただきたいと思います。

それでは、まず最初の方の聞き取りから始めさせていただきたいと思います。

【金平座長】 それでは、私どもは検証会議のメンバーでございます。本日、この愛楽園で会議を持たせていただきました。これを機会に、きょうは金城さんから、いろいろとこれまでのお話を伺いたいというふうに思っております。大変恐縮ですけれども、5分か10分ぐらい、お話をいただきまして、その後、委員とお話を交わさせていただきたいと思いますが、それでよろしゅうございますか。

【金城幸子さん】 はい。

【金平座長】 それでは早速ですが、どうぞよろしくお願いいいたします。

【金城幸子さん】 おはようございます。先生方、ほんとうにご苦労さまでございます。非常に聞きづらいアクセントかと思えますけれども、どうぞ最後までお聞きお願ひしたいと思います。

私は、昭和16年に熊本の回春病院で生まれました。私の両親は、私が生まれる前に沖縄での強制収容により、星塚敬愛園に収容されておりました。母が兄を身ごもったときに、墮胎手術を受けると強制されました。両親は、おなかの中の小さな命を守りたい一心で、敬愛園を脱走し、回春病院に逃げ込んだのでした。兄と私はそこで生まれました。私が生まれてから、両親は沖縄へ帰る決心をし、沖縄愛楽園に入りました。しかし、愛楽園では、兄だけは園の中の子供を育てる施設に引き取っていいと言われましたが、まだ赤ん坊だった私の引き取りは拒否されました。母は、親戚にも私の引き取りを頼んだそうですが、親戚で引き受けてくれる人はありませんでした。両親は、私たちを連れて台湾に渡りました。

しかし、そのうち母の病状が悪化し、母は日本政府のつくった台湾の療養所に入所させられました。私たち兄妹は母から引き離され、沖縄に帰されました。私は2歳にもなっていませんでした。沖縄では、私と兄とは別々の家に引き取られ、離れ離れになりました。私を引き取ってくれた養母は、私を大変かわいがってくれました。私は物心つくまでは、この母をほんとうの母親だと思っていました。

沖縄で激しい戦争があり、たくさんの方が死にました。母に守り育てられながら、私はこの戦争の時期を何とか生き延びることができました。しかし、7歳か8歳ころには、顔に斑紋ができていました。その斑紋はだんだんと全身に広がっていきました。私は米軍の施設を利用した病院に強制収容されました。外からかぎのかかる暗い部屋で、9歳の私は

ひとりぼっちでした。一体、どのぐらい、私はそこにいたのでしょうか。幼い私には時間の感覚もわからなかったのです。ただ、悪夢のような記憶だけが、今でも私の頭の中に焼きついています。光も入らず、壁越しにけが人のうめき声だけが聞こえてきました。斑紋ができて感覚を失っていた右足のすねには、どこでつくったかわからない傷がありました。その傷はいつの間にか化膿し、腐ったようになり、ウジ虫がわいてきました。私は毎日毎日、ただ、「母ちゃんよう、母ちゃんよう」と、育ての母を呼び、泣いているばかりでした。その後、私は沖縄愛楽園に収容されました。

実の母は、私たちが沖縄に帰されて間もなく、台湾の療養所で亡くなりました。25歳の若さだったといいます。私はそのことをずうっと後になって知りました。子供を守り、育てるために転々とし、台湾にまで行ったのに、子供たちと引き離され、苦難の中で寂しく死んでいった母。その無念さはいかばかりであったろうかと思います。

けれど、今、どこを探しても、母は戸籍に載っていません。兄は父の弟として記載され、私は母の妹として記載されています。しかも、私の生年月日は、母の一番下の弟であった昭和5年生まれのおじと同じ日で届けてありました。沖縄では、戦争で戸籍が焼かれてしまっていました。家族の申請で、戸籍は復元されていったのですが、母の家族は、ハンセン病になった母の戸籍を復元すらしなかったのです。

愛楽園の中学校を卒業した後、私は当時、園にいた遠縁のおばさんとおじさんの部屋の横に、私のための小屋をつくってもらって、おじさんとおばさんの世話をしながら、ここで勉強していました。このおじさんは私に、「これから先は、男、女、関係ない時代が来るよ。女もしっかり勉強しろ」とよく言っておりました。そして、私のために通信教育の手続きをとってくれました。しかし、私は園の大人たちに、「一度、療養所に入ったら、もう出られないのだ」と言い聞かされていたので、自分に何か将来があるなどと思えないまま、育っていました。おじさんに「勉強しろ」とうるさく言われ、半ばやけになって勉強していました。

そんなとき、岡山県の長島愛生園にあった邑久高校に進学しないかという話が出ました。当時の私は邑久高校の分室として、新良田教室が昭和30年にできたということも知りませんでした。愛楽園を出て、本土の高校に行けるのなら、行ってみたいと思いました。

当時、アメリカの占領下であった沖縄愛楽園からは、直接邑久高校に行くことができませんでした。私は当時、どこにあるのかわからない私の戸籍を探し出し、パスポートをつくり、友達と2人一緒に園を脱走し、鹿児島県の星塚敬愛園を目指しました。探し出した戸

籍では、私は昭和5年の生まれとなっていました。仕方がないので、そのままパスポートをつくりました。港の税関の人は、「おまえたち2人は、ほんとうに10歳も違うのか」と、私たちをじろじろと眺め回しました。私たちはドキドキしました。愛樂園から出てきたことがばれたらどうしよう。ばれたら園に連れ戻されると思って、生きた心地もしませんでした。「行ってよろしい」と言われて船に乗り込んだときには、ほんとうにほっとしました。

敬愛園で一生懸命に勉強しましたが、最初の入学試験には落ちてしまいました。長島愛生園に移り、浪人して、次の年の試験に無事に合格することができました。新良田教室の6期生です。私は18歳になっていました。

4年間の高校生活は、夢見ていたものとはかけ離れたものでした。教師たちは皆白衣姿に黒い雨靴、そう決められていました。私の入学の前の年までは、マスクまでしていたそうです。教室では、ほとんどの教師は教壇から離れず、私たちの席に近づこうとしませんでした。

職員室は生徒の出入りが禁じられていました。教師に用があるときには、入り口にあるブザーを押して、教師を呼び出しました。しかし、教師は出てくるのではなく、ドアの奥から顔をのぞかせるだけでした。中には、生徒が用があっても、居留守を使う先生もいました。

職員室の入り口には、クレゾールの入った洗面器が置かれていました。参考書の代金を持っていくと、それを受け取った教師は、そのお金をクレゾールの液でびちゃびちゃと洗って、それを窓ガラスにべたべた張りつけて、乾かしました。

そんなことを目の前にされるときの私たちのつらい気持ちを当時の教師たちはどう考えていたのでしょうか。要するに、邑久高校は隔離を当たり前のものとして成り立っていました。学校生活のあらゆる場面で、私たちは社会から隔絶された存在であることを嫌でも自覚しなければなりませんでした。

そうした中での先輩の鉄道自殺、後輩3人の自殺、私が一番大きな衝撃を受けたのは、実の妹のようにかわいがっていた親友の妹の入水自殺でした。彼女とは、女子寮では同じ部屋だったこともありました。いつも私を「さっちゃん姉さん」といって慕ってくれていました。ある朝、突然、私はたたき起こされました。彼女が夜に帰ってきていないというのです。私たちは必死で彼女を探し回りました。そのうち、だれかが、海の中のカキの網に遺体が引っかかっているを見つけました。何で死んだのか、ほんとうのことはだれにもわかりません。私は呆然となりました。

希望を持って新良田教室に来たはずの若い命が、どうしてこんなにも簡単に失われていかなければなかったのでしょうか。卒業式の日、私は友達二、三人と一緒に海岸に出て、もらった卒業証書をびりびりと破り捨てました。そんなもの持っていたって、何もならないとわかっていたからです。今、新良田教室の歴史が語られるときに、卒業者は307名、そのうち73%の225名が社会復帰と誇らかに言われています。しかし、だれ一人大変として、新良田教室の卒業生だと堂々と名乗って仕事をしている人はありません。ハンセン病の患者であったという経歴を隠さなければ、ハンセン病に対する偏見に満ちた社会の中で、真っ当な社会生活はできなかつたのです。新良田教室の卒業生は、今もただただ過去のことをかたい秘密として持ち続けて生きています。今も私たちの苦悩は続いているのです。

私は邑久高校新良田教室を卒業した後、園を退所して、会社の電話番、センコウ屋、スナックのホステス、清掃など、いろんな仕事を渡り歩きました。スナックで知り合った男性と結婚し、子供までもうけましたが、結婚後10年は夫にも自分の過去を話せませんでした。初めて自分の秘密を打ち明けたときには、離婚を覚悟していました。実は、話があるという話し始めたものの、なかなか話すことができずに、30分ほどは言いよどんでいました。話し始めると、夫は私の話を涙を流しながら聞いていました。「大変だったろうな、ずうっと秘密にしている苦しかったらうな」と言ってくれました。

その間も薬をずうっと飲み続けていましたが、DDSの副作用で体に発疹ができて、愛楽園に再入所することになってしまいました。しかし、子供たちはまだ小さく、生活は苦しく、私はたびたび園を抜け出してアルバイトをしながら、子供たちを育ててきたのです。

国賠訴訟の話を知り初めて聞いて原告になったころ、私にはハンセン病についての正しい知識は何もありませんでした。らい予防法のこと、自分の病気がすでに治っていることさえ知りませんでした。裁判の説明で、やってきた弁護士さんたちの話を聞いて、初めていろんなことがわかってきました。それからは、私も改めてハンセン病の隔離の歴史のことを学び直しました。何が私たちを苦しめてきたのか。ようやく私にもわかってきたのです。

2001年5月11日の判決は、私たちの思いを裁判所が聞き入れてくださった結果だと思います。国の控訴断念の知らせは、東京で多くの仲間とともに聞くことができました。わあっと歓声が上がったそのとき、私の頭の中には、幼いころの悪夢のような日々が走馬灯のように駆けめぐりました。涙があふれ出て、とめることができませんでした。

昨年5月、私は愛楽園を正式に退所しました。昨年の4月から始まった社会復帰支援策

が私の退所を支えてくれています。こんな制度がもっと早くあったら、今、家にいらっしゃる方たちにも、もっと別の人生があったのではないかと思います。今ごろになって立派な制度ができて、家族と引き離され、温かい交流もなく、高齢になってしまった入所者の方々は、園を出ていくことはできないのです。これからの社会がもっと温かく私たちを迎えてくれて、一日も早く差別や偏見を解消できるよう、私は園の外にあっても努力していこうと決意しております。

今、私は、らい予防法の廃止も裁判の勝利も知らずに死んでいった、戸籍にさえも残っていない母や、邑久高校で自殺した友人の妹のことを思います。どんなに無念だったことでしょう。私は、無念のうちに死んでいった者たちの思いを歴史の中に埋もれさせたくありません。真相究明するというのであれば、ぜひとも死んでいった人たちの思いにこたえる仕事にしていきたいと思います。そうすることが、このような悲劇を二度と繰り返さないことにつながっていくと信じております。

検証会議の先生方には、そのために尽力していただきますようお願いいたします。

終わりたいと思います。(拍手)

【金平座長】 金城さん、どうもありがとうございました。短い時間の中に、これまでの金城さんのいろいろなご生活、そして、思いというふうなものを語っていただきました。それでは、委員のほうからお尋ねしますので、よろしくをお願いします。

じゃ、どなたからでもどうぞ。鮎京委員、お願いします。

【鮎京委員】 鮎京のほうからお伺いいたします。7歳で斑紋が出て、米軍の施設に入所されたというときに、「母ちゃん、母ちゃん」といって泣いていましたという金城さんのお話は、ほんとに何回聞いても胸が詰まるんですけども、米軍の施設に収容されたときの状況をもう少し詳しくお話ししていただけますか。

【金平座長】 金城さん、よろしいですか。

【金城幸子さん】 どういうふうに話していったらいいんでしょうかね。その生活のことをお話ししていいですか。

【鮎京委員】 はい、生活でもいいですし、だれがどうやって連れていったのかという話でもいいし、覚えてられることを。小さかったから、あんまり覚えてないかもわからないけれど。

【金城幸子さん】 ちょっとだけ覚えてますけども。育てのお父さんの方の上から4番目の姉に、私は連れられてきたんですね、その病院に。そうすると、今、軍の中にある兵

舎ですね、あれが病院でした。隅っこのほうに、私が来るということで用意されていたか、そこははっきりわかりません。真ん中から大きな板で仕切られて、隣は負傷した患者さんたちが入るところ。私が入るところは、畳1枚ほどのベニヤ板が両向かいに敷かれて、真ん中は人が通れるほどの、ちょっと下がった砂地になっていました。そして、ドアがついていましたが、あけられませんでした。

そこでの中での私の記憶にあるのは、食事をした覚えも全然記憶もないんですね。もちろんふろも入ったことない。だれひとり入ってきた覚えもないんです。私はいつもその仕切られた真ん中の板にこういうふうに耳を傾けて、隣の話し声ですかね、それを聞きながら、慰められていたんじゃないかと思っています。

そして、一つだけ記憶に残っているのが、ドアの前の砂地の上に白い丸いお盆が置かれていたという記憶だけあります。その後は何もありませんけど。

【鮎京委員】 期間としてはどのくらいおられたことになるんですかね。

【金城幸子さん】 私が、はっきりして断定しては言えないんですけども、大体年齢から、ここに入ったところからの、ちょっと数字で自分なりに計算してみると、2カ月から3カ月ではなかったかなと。どうして自分を愛楽園から早く連れにこなかったんだろうという思いがあったんですよ。そうしますと、園の方たちに聞きますと、400名収容するところに1,000人余りの患者がいるために、子供一人さえ引き取ることができなかった。なぜ引き取りに来たかという、私の足が腐れて、虫がわいてきたんですね。そういうわけで、もうどうしても迎えにこらざるを得なかったんだろうというふうな私の考えであります。

【金平座長】 並里委員。

【並里検討会委員】 並里からお尋ねいたします。その2～3カ月って、結構長い時間だったわけですけど、その間に診察らしいものを受けたことは、どんな記憶がございましたか。

【金城幸子さん】 たった一度だけ外に、姉かだれかわからないけども、連れていかれて、離れていたんですね。その方が多分、今思えば、お医者さんだったんだろうね。白い何かね、白衣みたいのを付けて、離れていたんですよ、大分。そして、遠くから、私を眺めていたという、その……。

【並里検討会委員】 眺めただけですか。

【金城幸子さん】 眺めていたという覚えがありますね。そのときに何か言葉の端に、

ヤガジという言葉じゃなかったかな。考えてみると、早くヤガジに連れていけ、連れていけじゃなかったですかねと、私の思いなんです。

【並里検討会委員】 普通の診察、我々が常識的に思う、体を診てもらったり、診察したり、足にけがしていらっしまったわけですから、その手当てを受けるとかですね。

【金城幸子さん】 全然覚えてないですね、そういうことは。そのお医者さんは離れていますのでね、ずうっと。

【並里検討会委員】 さわってないんですよ。

【金城幸子さん】 離れていますので、全然さわることもしなかつたんだと思います。

【並里検討会委員】 もう一点済みません。再入園なされた時期は昭和何年かご記憶でしょうか。あるいは千九百……。

【金城幸子さん】 愛楽園に入ったのが、私の記憶では昭和24年だと思いますけども、福祉のほうで調べてみますと、25年ってなっているんですね。

【並里検討会委員】 それは最初の入園ですよ。

【金城幸子さん】 そうです。入園です。

【並里検討会委員】 昭和二十四、五年ですよ。その後で、ちょっとまた悪くなさつて、もう一度入られたとおっしゃった、それは。

【金城幸子さん】 20年前に入ったんです。

【並里検討会委員】 今から20年前？

【金城幸子さん】 20年前に、はい。

【並里検討会委員】 今から20年前ですよ、今からね。

【金城幸子さん】 はい。

【並里検討会委員】 そうすると、1982～3年ですよ。そのころに、その後で続いておっしゃった言葉が、この病気についていろんなことを知らなかった、何も知らなかったということをおっしゃったんですが、そのころに、二度目にちょっと入られたときに、園内ではそういう教育というんでしょうか、我々医師の立場から、皆さんにいろんな、この病気はこうですよとかいうことをお教えすることはなかつたんでしょうか。

【金城幸子さん】 なかつたです、全然。全くなかつたです。

【並里検討会委員】 なかつたですか。ありがとうございます。

【金平座長】 宇佐美委員。

【宇佐美検討会委員】 長島愛生園の不良田教室が、いかに残酷な差別の中で、勉強に

も大変ご苦労されたということ、また友達の妹さんが自殺したときも、私も立ち会ったこともございますので、当時の新良田教室における差別と、それから希望がなかったと思うんですが、進学とか就職とかそういうものについて、学校のほうにおいては指導とかなんかいたしましたですか。

【金城幸子さん】 なかったですね。全くなかったです。

【宇佐美検討会委員】 そうですか。

【金城幸子さん】 はい。

【宇佐美検討会委員】 当時、社会復帰基準も出とったと思うんですけども、園のケースワーカー、福祉も学校の先生方も、そういうことについて指導とか、将来についての希望を与えるような教育というのはなかったですか、やっぱり。

【金城幸子さん】 なかったです。

【宇佐美検討会委員】 そうですか。

【金城幸子さん】 はい。

【宇佐美検討会委員】 今、大学行ったり、またいろいろと職業学校へ行った者もおりますけれども、自分でいろいろ苦労して学校へ行ったという形ですね、そういたしますと。

【金城幸子さん】 そうだと思います。

【宇佐美検討会委員】 実は、新良田教室に高等学校をつくるときに、私も委員やっとなんですけれども、長島につくらずに、多摩全生園につくれということを入所者は全患協を通じて頼んだんですけれども、絶海の瀬戸内海の島の中で隔離するためにつくった学校だという形で、ほんとうに人間を、我々たちの悲願であった中等教育をハンセン病の子弟にもつくってくれという要求をしたんですけれども、結果的には、島の中で偏見と差別を助長するような教育であったということについて、ほんとに自戒の念にもたえませんが、また卒業した人に対しても、「新良田」の本の中でも、卒業生の名簿がないという状態でございますので、今でもその新良田の卒業記念の本についてのご感想、また自殺者に対する思い出について、感想があったら、皆さんにお聞かせ願いたいと思います。

【金城幸子さん】 何か私に……。ちょっと難しいんです。

【宇佐美検討会委員】 亡くなった友達の妹のこと、また、そういう差別されたこの学校教育についてですね、金城さんが、今思い出しても問題があったということについて、先ほどから陳述いただきましたけれども、今考えても、こういうことが問題で、皆さんに訴えたいということがあれば、一言でも感想をお聞かせ願えれば、ありがたいと思ってお

ります。

【金城幸子さん】 私があの当時、印象に残ったことといえば、先生方が授業を終わりますと、教壇から真っ直ぐに職員室に向かって走っていくんですね。私たちが質問しようと思って、先生を追っかけると、「後で後で」といって応じなかった。そういうことが一番、あの当時、印象に残っていたし、それからもう一つ、私が今でも絶対に納得できないということは、春休みとか夏休みに、皆さん親に会いたいですね。ふるさとに帰りたいんですよ、沖縄の子たちは特に。それで、病院側といったらおかしいですね。お医者さん方は2泊3日とか1週間の許可を与えるんですけども、あの当時の新良田教室では、成績が50点以下でしたかな、40点以下か、そのところははっきりわかりませんが、2回再試験というのがありまして、2回も落ちると、帰してもらえなかったこと。そして、帰る子は校内放送、大きなマイクでですね。一般の方たちも聞こえるぐらい大きな声で、名前を呼び上げることで、あれはとっても悔しかったです。

というのは、私が4年生のころですけど、女子寮の寮長をしていたんです、4年生のときに。そうすると、4人ずつ部屋は入るんですね。女子寮が10室ありまして、4人ずつ入るんですけども、その入学したばかりの女の子が、もう机に向かってこういうふうにして、わあわあ泣いてるんですよ。私、帰ってくると、「せっかくお母さん、弟に会えるって楽しみにしてたのに、行けないよ」というて、泣いてるんですよ。そのことだけは印象に残っていますね。そうすると、「どうしてか」と言ったら、「数学が、テストが2回も受けただけ、通らなかった。だから帰れないと言われた」と言っていて泣いていました。そして、私は皆さんよりは年齢が2つ3つ上でしたので、これは絶対許せないといって、私は職員室に行って、その先生を呼び出して、「おかしいんじゃないか。成績と帰ることと、何の関係があるんですか」といって、食ってかかったことがあるんですよ。そうすると、その先生が言うには、「じゃ、2～3日か4～5日待ってくれ」と、そこで話が出たかどうか知りませんが、大きな校内放送で、「金城幸子さん、すぐ職員室に来なさい」と。何だろうと思って走っていくと、「あの子が行けることになったからね」ということを言われました。そういうことが一番、その当時の印象に残っています。

それでいいでしょうか。

【宇佐美検討会委員】 はい、ありがとうございます。

【金平座長】 弐委員、どうぞ。

【弐委員】 愛生園の敷地内に建った高校なんですから、愛生園の施設側が、この高校

の先生やなんかとの連絡というか、あるいは、ハンセン病に対する理解をしてもらう、そういう協議とか、そういうのはなされなかったんですか、全然。今の話だったら、全くハンセン病のことを全然知らない教師が来て、患者である生徒に教えて、そのまま、ただ教育に携わっているんだという形だけしかとらないというふうに思えるわけですが、施設側はこの問題には全然タッチしてなかった。それは、もしかして、その辺まではおわかりにならないかもしれませんが、感覚として、そういう連絡やなんかはなかったというふうにお思いになりますか。

【金城幸子さん】 はい。今、思いましたら、なぜあの当時、私は年齢いってるわりに幼稚だったんだと、今、反省していますけど、なぜ自治会のほうに、自分がいわば文句を言っていかなかったのが、ちょっとまずかったのかな。それとも生徒会のほうで、そういうお話を持ち出さなかったのが、ちょっとまずかったのかなという後悔はありますね、自分自身としては。

【筈委員】 施設側は、ほとんど高校にも出入りしていない、施設側の職員は？

【金城幸子さん】 そういう記憶は全然、私には.....。

【筈委員】 ないね。

【金城幸子さん】 はい、全くないですね。もっと別な方たちは知っている方もいるかと思いますがね。私の場合はなかったですね。

【筈委員】 はい、すみません。

【金平座長】 光石委員。

【光石委員】 あの子は行けることになったからねという話を先生がされたと。先生方の中に、一人でも皆さん方、患者さんに対して、自分たちのやっていることが、ちょっとおかしいというふうに反省といいましょうか、そういうふうな感じで接する方はおられなかったんでしょうか。要するに、皆さん方を全くの人間扱いしないような教師ばかりだったんでしょうか。それとも.....。

【金城幸子さん】 違います。阿川真先生とって、歴史を教えてくださいました岡山のあるお寺のお坊さんですけども、その先生だけは特別変わっていたんですね。私は変わっていたという、当時、あのときはそう思っていたんです。皆、ほかの先生方が白衣姿で、私たちに接しないのが当たり前だというふうな思いでいたんですね、私の中には。ですから、その先生がやることから一から十、怖かったような覚えがあるんです。なぜかという、その先生だけは、教壇からさあっとおりてきて、私たちの肩をたたいたり、もうこういう

ふうに抱き抱えたり、相談すると、もう外でずうっとくつついて、お話を聞いてくださるんですよ。私、一度だけ、その先生に言った覚えがあります。「先生、あんまりくつつくとうつるよ」って、私言ったことあります。その先生に背中をぱしっと、「うつってもいいじゃないか」って、背中をぱしっとたたかれた、あの背中中の痛みを今もすごく感謝の気持ちで持ち続けています。ですから、新良田教室を出た先輩後輩たちに今、会うんですけど、ときどき。その生徒たちから出る言葉は、「あの阿川は元気かな。真は元気かな」。その先生の名だけは出ています。ほんとにああいったときに、あの先生がおられたということが、私たち新良田教室を出た生徒さんたちの心の中を支えていたではないかという気がいたします。

【光石委員】 そのお坊さんは宗派とかそういうのはご記憶ありますか。

【金城幸子さん】 そういうことまで、全然わかりません。とにかくお寺のお坊さんだった。頭をいつもつるつるてんにして、白衣をなびかせて、いつも。あのころの、今で言うオートバイというんですかね、ああいうふうな小さな乗り物で、学校に来られたというのを。男生徒は、「坊主」とか「なまくさ坊主」とか、もう呼び捨て。女生徒のほうは「阿川」とか、私なんか「真」とか、ほんとに親しみを込めたような感じがいたしました。もう、この先生だけはほんとに、いつまでも印象に残っております。

【宇佐美検討会委員】 余分ですけれども、阿川先生は、邑久町の本庄の真言宗のお寺のお坊さんで、最近亡くなりました。

【金平座長】 ありがとうございます。じゃ、井上委員。

【井上検討会委員長】 井上です。どうもありがとうございました。ちょっと話を移して、最初退所されて、社会生活された。そのときに、お名前、病気であるということは隠されていた。そのほかにいろいろ問題、困ったこと等あったと思うんですが、それをまずお聞かせいただきたい。それから、二度目に今度、去年出られて、社会生活されているというその違いですね。それを2番目にお聞かせいただきたいんですが。

【金城幸子さん】 最初に退所したときのいきさつが、自殺をしたあの妹さんのお姉さんと、私は親友同士ですので、ここから脱走して、また岡山にも、彼女は5期生として入っていますので、彼女の手紙やいろんなあれで、早く出ると。一生おまえは愛生園どまりか。早く外に出る出るという励ましの手紙をいただいて、外に出ました。いろいろ仕事も、新聞を見て、履歴書にはうその履歴書を書いたり。沖縄出身ですから、沖縄の高校を書くんですよ、うそついて。そして、沖縄で働くときは本土の……。もう一番印象に残ってい

るのは岡山県のアサイ高校、有名な。この高校を使っていました、いつも。そういうふうな外での生活は、いつももうびくびくですね。休まる暇はなかったような覚えがあります。

そして今度、退所したときには、裁判の結果、やっぱり50年ほど前に自分の病気が治っていたということをあの知らされた2カ年前の先生方から聞いた言葉がショックでしたね。そういう思いで退所しましたから、今ではもう、何でもなかったんだ。自分たちは当たり前、普通の人間だったんだということを知らされて、その気持ちは全然、大分違いました。

それでいいですかね。答えになってない……。

【井上検討会委員長】 ありがとうございます。それで、今は周りの方はどうですか。今、あなたのお気持ちが、そういうふうに裁判で、自分も人間であるという、当たり前だという、こういうお気持ちになられた。周りの方たちはどうでしょうか。

【金城幸子さん】 私の周りですね。いわば仲間たちですか、それとも……。

【井上検討会委員長】 仲間たちというより、もうちょっと広い社会といいましょうか。

【金城幸子さん】 私は現在、このような下手な語りです、小・中・高と全国を講演して、講演いうたらちょっとおおげさですけど、語りべとして歩いています。そういう中で、皆さんの受け入れがすごく変わられた。

私がちょっと腑に落ちないのは、やはり自分たちの家族、親戚ですね。私の親戚のことを言いますと、この愛楽園の近くのある高校で講演をしました。そのときに40年ぶりにある私の親戚から電話をもらいました。「ぜひ、あなたの過去の話を知りたい」と。「ああ、そうですか。じゃ、来なさい」と言って、40年ぶりに彼女が来ました。聞きました。そして、校長室に入れられたんですね、私、「どうぞ」言うて。その後からついてきたんですよ。その席で校長先生が言うには、「あなた方は親戚ですか」と言ったんですよ。そうすると、彼女からの言葉が「いいえ、違います。友達です」と言われたんですね。悔しかったです、とって。それで、私はこのような気性ですので、出てから、「もう、これからは電話もするな。あなたの顔も見たくないから」ということを言いましたら、私の言い方がまずかったのか、もうずうっと電話は来なくなりましたけどね。

家族なんです。親戚なんです、私たちの受け入れができてないのは、私がこういうふうに堂々とできるのは、やっぱりこういうふうな家族、親戚は要らないや。自分たちの夫と子供たちさえ支えてくれて、それから支援の会の皆さんたちのやさしさで、私は今、すごく勇気を持って、皆さんの前でも語りべとして話をしている現在です。

【金平座長】 ありがとうございます。そろそろ時間なんですけど、いかがでしょうか。
並里委員。

【並里検討会委員】 高校の話に戻ります。すみません。クラブ活動がいくつかあった
かなって。

【金城幸子さん】 何ですか。

【並里検討会委員】 邑久高校というんですか、高校時代にですね。実は私の所に、元
患者さんの中に、その出身の方がたくさんいらっしゃるんですよ。高校の出身の方。そ
の方々から出てくるんですけど、クラブ活動みたいなものがあったと聞いておりますが、
そういうものは。

【金城幸子さん】 私が一度だけ覚えているのが、部活動というと、バレー部とかテニ
スじゃなかった、あの当時はピンポンといていましたね、卓球。そういう部活動が。

【並里検討会委員】 それは学校側が組織してくれてたんでしょうか。

【金城幸子さん】 生徒たちだったと思います。

【並里検討会委員】 生徒たち、自主的に？

【金城幸子さん】 はい。

【並里検討会委員】 それを指導する先生とかいうことはなかった？

【金城幸子さん】 そして、4年間の中で一回だけ、岡山の、私ははっきり覚えてない
んですよ。邑久高校じゃなかったと思いますけども、別の高校から、バレーの試合をした
覚えがあります。私は男生徒の中に混ざって、女生徒だけ入って、私だけ入って、試合を
やった覚えがあります。多分、3年生のころだったんじゃないかな。

【並里検討会委員】 多分、学校がしたのかどうかはよくわからない……。

【金城幸子さん】 はっきり覚えてませんね。

【金平座長】 よろしいですか。じゃ、最後にちょっと私、一つだけ伺っていいですか。
結婚して10年目に、あなたはご主人に病気のことを話そうと思って、お話になったわけ
ですね。ご主人が聞いて、そして、「大変だっただろうな」、そういうふうにおっしゃった
と。そのお話を聞いて、お二人のその後のご生活も、きっとそこからまた新たに出発した
んだろうと思って、大変、私は思い深く伺いました。ただ、10年目に、ここで話そうと
思った何か動機があったんですか。

【金城幸子さん】 ありました。そういうきっかけというのは、岡山の、あの当時、愛
生園の会長さんした方が、沖縄出身の方だったんですよ。その方に私は娘のようにすごく

かわいがられました。その方が45年ぶりにご夫妻で里帰りするという手紙をいただいたんですよ。それまでにずっと主人には内緒で文通したり、子供たち3人のお年玉といって、お金を送ってくれたりするんです。主人と一緒にになったときは、もう私は既に27歳になっていますので、ああ、過去に彼氏が、だれかボーイフレンドでもいたんだろうという思いで見えていたそうですよ、主人は。

そうすると、何日か後に自分は里帰りすると、来たんですね。私の中には、どうしてもその方に主人を会わせなかったんですよ。できるならば、もう親以上ですから、ぜひ会ってもらいたいという気持ちがありまして。打ち明けました。なぜかという、その方たちはご夫妻とも、見て後遺症があります。ですから、急に驚かしては大変だろうという思いで、まずその方が来られなかったら、私は今もずっと隠し通していたんじゃないかならうか。また、表には出なかったのではなからうかという気がしてですね。むしろすごく感謝します、その方に対して。

【金平座長】 ありがとうございます。よろしゅうございますか、あとは。

それでは、金城さん、どうも、いろいろとつらいお話も聞かせていただきまして、ありがとうございます。死んでいった人のことにも思いに、そういう思いにもこたえてくれというふうなご希望もしかと伺いました。ほんとに本日はありがとうございました。お疲れさまでございました。

【金城幸子さん】 ありがとうございます。先生方もよろしくお願ひいたします。(拍手)

【金平座長】 それでは、引き続いてですが、最初に事務局のほうから申しましたように、別室でもう一人、私どもにお話しただけの方がお待ちでございますので、そちらのほうに、委員の方、お移りいただきたいと思います。

【事務局(加納)】 それでは、11時15分をめぐりに再開をさせていただきたいと思ひます。こちらのほうの会場で再開をさせていただきたいと思ひますので、よろしくお願ひいたします。

了